

Strength to Love を読む

— 公民権運動とキング牧師のキリスト教思想 —

加 藤 恒 彦

はじめに

かつて黒人が奴隷であったアメリカで、オバマ氏が黒人として初めて大統領に選ばれるという歴史的な出来事が起きた。この出来事の不可欠な、そして直接の歴史的前提が50年代中盤から60年代にかけてアメリカを揺るがせた公民権運動であったことは明らかである。さらに公民権運動の背後には、奴隷制の時代とその後の人種隔離制度の時代を通じ、様々な形態で三百年以上にわたって繰り返されてきた黒人の自由を求める運動の伝統が存在したのであり、公民権運動は、その歴史的クライマックスであったと言えよう。その結果としての1964年における公民権法、翌年の投票法の成立、そして公民権法に基づいて実施されたアフターマティブ・アクションは、黒人ゲッターにおける貧困層の黒人の経済条件を改善することこそできなかったものの、黒人の中産階級のアメリカ社会への統合過程を促進し、様々な分野で成功する黒人たちを生み出した。

オバマ氏の大統領選出は、優れた候補であれば人種や性にかかわらずアメリカの最高政治権力者の地位にさえ就くことができるという、40数年前には考えられなかったような変化がアメリカの政治や社会のなかに生まれていることを証明した。オバマ氏は「チェンジ」を訴えて大きな支持を得たが、オバマ氏自身がアメリカ社会の「チェンジ」の成果だったのである。

公民権運動がそのように歴史的な成功をおさめたのには、今から振り返れば次のような客観的要因と主体的要因があったことを概ね認めることができよう。

第一に、第二次世界大戦の性格と第二次世界大戦後の新たな国際秩序におけるアメリカの位置という問題がある。第二次世界大戦はその性格においてヨーロッパにおいてはドイツをはじめとする人種主義的ファシズム勢力と民主主義擁護の勢力の戦争、また、アジアを侵略する日本軍国主義との連合軍の戦いという民主主義的性格をもっていた。そして戦後の世界秩序の方向性をそのような民主主義的性格が規定することになる。

また、その後打ち立てられた新しい国際秩序において、一方では、ソビエトを中心とする社会主義体制とアメリカを中心とする資本主義体制との冷戦構造が生まれ、他方では相次ぐアジア・アフリカ諸国の独立と国連への加入という新たな動向のなかで、新興国をめぐる綱引きが両体制間に起こり、自由主義体制の旗手としてのアメリカが、その内部に南アのアパルトヘイトに等しい人種差別体制をかかえることがアメリカ政府にとっても不都合になりつつあったのである。1954年に「公立学校での人種隔離を違憲」とするブラウン最高裁判決は、そのような内外の有利な世界史的歴史展開を背景にし、古き奴隷制の伝統を色濃く残していたアメリカ南部と連邦政府との間にいわば楔を打ち込むことになったのである。

第二に、公民権運動が、言論・集会・結社の自由と言った民主主義的諸権利が保証され、テレビをはじめとするメディアが発達したアメリカにおいて行われた運動であったこと。このことは南部の裁判所による差別的な法律による有罪判決、それに抗議するデモへの禁止命令や警察による取り締まりと逮捕・投獄、爆弾などによるテロ行為にもかかわらず、運動が暴力に訴えることなく言論と大衆的行動によって要求や主張の実現を図る余地や可能性があったことを意味する。とりわけ第一の要因ともあわせて、ケネディ大統領のもとにある連邦政府による運動への一定の支持や保護を期待できる余地があったことも大きいであろう。

第三に、公民権運動の理念や目的、そしてその方法・手段・戦術が理にかなったものとして行われたことである。すなわち、公民権運動はその理念や目的において、アメリカ社会において様々な人種の平等を基礎にした人種統合を目指す運動であり、多数派の白人を排除し、敵視するのではなく、その協力を求めた運動であったことである。言い換えれば、アメリカ黒人の自由への長い闘いの歴史において、黒人がアメリカという国において自由になることへの絶望や焦燥感からアフリカにアイデンティティや誇りの拠り所を見出したり、アフリカに帰ろうと主張する分離主義的、民族主義的傾向が絶えず存在し、人種統合の方向と対立してきたのであるが、公民権運動は、アメリカ社会において黒人が白人と同等の立場で社会に参加することを目指したのである。この点で公民権運動は、19世紀の偉大な解放闘争の指導者フレデリック・ダグラスや20世紀に入って、その方向を継承したW.E.B. デュボイスの伝統を継承している。ダグラスやデュボイスに代表される人種統合をめざすという方向は、アメリカ独立宣言や憲法に謳われている万人の自由と平等という理念に合致し、かつ、様々な地域からの移民をアメリカ人として受け入れてきたアメリカの形成過程そのものとも合致する合理的な方向であったといえよう。

また、公民権運動は、その方法・手段・戦術においても合理的なものであった。すなわち、一方では、人種差別制度への抗議と抵抗を、草の根の大衆のエネルギーに依存しつつ街頭での直接行動にでるといった闘争的な形をとりつつ、他方では、非暴力主義を貫くことにより、無抵抗の黒人に暴力を振るう警察や白人優位主義者の非道さを世界に訴え、多くの白人の良心を揺

り動かしたのである。運動が、後に白人と黒人との間に憎悪や怨恨を残すのではなく国民の融和に結びついてきたことの大きな要因が、この運動の理念と手段にあったことは明らかである。

公民権運動は、そのような特徴において歴史に例を見ない偉業であるだけでなく、今後の世界における社会変革を導く理念と手段として人類の未来を照らし出しているとも言えるであろう。

第四に、公民権運動がキリスト教国であるアメリカで、キリスト教の理念に基づいて行われたことである。公民権運動は、黒人教会を母体として始まり、キリスト教の牧師であるキング牧師をはじめとする南部黒人教会の指導者が運動の戦略・戦術を決定することができた。これは、アメリカ国民の多くが共有する価値観を土台にして黒人たちが自らの大義を人々に訴えることができたことを意味する。多数派の白人の心を動かす以外に勝利しえなかった運動においてこれはきわめて重要な要因であった。

そうした公民権運動を成功に導いた様々な要因のなかで、拙論が特に注目したいのは、キング牧師のキリスト教思想である。キング牧師は運動の理念と手段をキリスト教の教義そのものによって基礎づけたのである。

キング牧師といえばガンジーの非暴力的抵抗から学んだということが強調されるが、キング牧師は、彼が理解するものとしてのキリスト教的土台の上にガンジーの非暴力的抵抗の思想を受け入れたと言ったほうがむしろ正しい。キリスト教的土台がなければ非暴力的抵抗運動は単なる戦術となり、本当の意味で人々を鼓舞することはできなかつたであろう。運動を支えた精神の真髓を成すのはキング牧師のキリスト教理解だったのである。

そのようなキング牧師のキリスト教思想を体系的に見ることができるのが、彼の牧師としての説教集 *Strength to Love* (1963年)¹⁾ である。拙論の目的は、*Strength to Love* の分析を通じてキング牧師のキリスト教観を分析することにある。

Strength to Love (1963年) は、1955年末、公民権運動の引き金となったモンゴメリー・バスボイコットから1963年のワシントン大行進に至る8年間にキング牧師がモンゴメリーのデクスター・アベニュー・バプチスト教会 (Dexter Avenue Baptist Church) とアトランタのエベネゼール・バプチスト教会 (Ebenezer Baptist Church) で行った説教をまとめた書物であり、その幾つかは、ジョージアの刑務所内で書かれたものだという。つまり、公民権運動の実践のなかで生まれ、鍛えられ、試されたものとしての性格を持っているのである。

従来、キング牧師といえば黒人差別廃止運動の指導者として、また、マハトマ・ガンジーの非暴力的抵抗運動からその哲学を学んだ人として日本でも広く知られているが、キング牧師のキリスト教思想については黒人問題に関心の深い研究者の間でもあまり知られていない。アメリカにおいても「キング牧師の思想の研究者がキングのキリスト教神学者としての貢献についてまとめた研究をしていない」という指摘もあることから事情はそう変わらないようである²⁾。

だが、キング牧師に関心のある人々の間での本書の位置は思いのほか高いようである。本書の序文において故コレッタ婦人は、「キング牧師が書いた本のなかで、これを読んで私の生き方が変わったといつも言っていただけの本を一冊あげるとすれば、それは *Strength to Love* です」³⁾と述べているからである。

このコレッタ婦人の言葉の正しさに私自身が肯首したのは、イギリスのブラック・ブリティッシュの作家、キャリル・フィリップス (Caryl Phillips) の“Cargo Rap”を読んだときのことである⁴⁾。

物語は、ブラック・ナショナリズムが台頭した60年代初頭から末にかけてのアメリカのアラバマ州の獄中を舞台に、黒人解放の「革命思想」や理論に目覚めた黒人青年の挫折を描いている。この青年は、「革命思想」の立場から父母や妹の意識を革命的な道に導こうとし、意図とは逆に彼らを傷つけ、遠ざけてしまう。また、出所の時期が近づくたびにトラブルを起こし、再び独房に舞い戻るといふ愚行を繰り返す。物語の最後で絶望と挫折感に襲われる。そのようなときに彼が手にしたのがキング牧師の本書であった。本書によって彼は、自分に「愛する強さ」が欠けていることがその挫折の深い原因であることに気付くのである。

また私は、本書を読みながら、イスラエルとハマスの間の泥沼の暴力と憎しみの応酬のこと思わざるを得ない。それこそキング牧師が運動を進める立場から避けようとして論じてきた事態だからである。キング牧師の基督教の哲学と倫理は次に見るように徹底してそれを乗り越える論理、闘いを通じ、敵同士であった人々の間に相互信頼に基づく平和的共存を可能とする論理を追求しているのである。

本書においてキング牧師が語っているのは、キリスト教徒としていかに生きるのかという普遍的なテーマであるが、それを聴いているのは公民権運動に参加している黒人信者たちであり、キング牧師が語るキリスト教徒としての生き方とは、黒人たちがキリスト教徒として公民権運動を闘う上での基本的な生き方、考え方なのである。つまりキング牧師は基督教の教義を社会変革に深くかかわるものとして理解し、語っているのである。言い換えれば、キング牧師は「解放の神学」としてのキリスト教理解をすでにこの時期に自分のものにしていたのである。

では何故、どのようにして、若干26歳の青年牧師としてモンゴメリーのデクスター・バプチスト教会にやってきたばかりのキング牧師がそのような先駆的なキリスト教思想を持つことができたのであろうか？これについては、キング牧師の生い立ちや、思想形成過程を描いているキング牧師の自伝が重要であることはいうまでもない。ここではキング牧師の思想形成に焦点を絞り、おもに自伝に依拠しながら簡単にまとめておきたい⁵⁾。

キング牧師は父が牧師を務めるアトランタの黒人教会で育つのであるが、やがて黒人教会の感情的で熱狂的な礼拝のスタイルやで聖書の字句をそのまま信じる信仰のあり方に疑問を抱く

ようになる。しかしモアハウス大学に進学しキリスト教神学の授業を受け、初めて、科学や思想の現代的展開を踏まえた知的に洗練された現代的聖書解釈に触れ、大学卒業時に父の後を継いで牧師になる。

次に進んだクローザー神学校 (Crozer Theological Seminary) ではジョージ・W・デイビス (George W. Davis) 教授の福音主義的リベラリズム (Evangelical Liberalism) の講義に深く共感する。そこには黒人教会では得られなかった知的な満足を得ることができたからである⁶⁾。

他方、人種隔離制度という社会悪の存在に憤りを持って育ってきたキング牧師は、社会悪を無くすための方法について本格的に勉強し始め、様々な思想家の社会的、倫理的理論を読みあさる。そうしたなかでキング牧師に消し難い影響を与えたのは、ウォルター・ラウシェンブッシュ (Walter Rauschenbusch) の『キリスト教と社会的危機』であった。この書物のキング牧師にとっての重要性は、「キング牧師の社会的関心に神学的な基礎を与えた」点にある。すなわち、キング牧師はラウシェンブッシュの「福音は人間の魂だけでなく、その体も、魂の幸せだけでなく、物質的な幸せをも、つまり人間全体を扱うべきだ」という主張に共感し、「人間の魂への関心を表明しながらも、・・・人間の心を窒息させる経済条件、人間の心をダメにする社会的条件に同じ位関心を寄せないような宗教は精神的に不健全な宗教であり、亡びる他ないのである」という確信を持つに至ったと述べている。

さらに、キング牧師は、牧師の役割を二元的なもの、すなわち一方で牧師は社会の変革に向けて個々の人々の精神を変革しつつ、他方では、牧師は社会の変革にかかわり、そのなかで人々が自己変革できるようにすることが大切だと考えたのである。こうしてキング牧師のキリスト教は、社会変革的实践を支えるものとしての性格を当初から持ち、解放の神学の先駆となったのである。

しかしキング牧師はラウシェンブッシュの全てを肯定したわけではない。彼の19世紀型の楽観的進歩主義史観には賛成しなかった。というのは、あまりに人間の性質について楽観的な見方だと思えたからである。

また、社会悪の除去についての方法に関心を持っていたキング牧師はマルクスにも関心を持ちクローザーでの二年目のクリスマス休暇に、『資本論』や『共産党宣言』を読む。しかしマルクス主義が①神の存在を認めない、②倫理的相対主義をとっている、③全体主義的政治形態を取っている、という観点から一線を画す。だがキング牧師はマルクスの思想の全体を否定したわけではない。資本主義国における貧富の差や資本主義の功利主義、物質主義文化への批判には共感するのである。

この頃キング牧師は、初めてマスト博士 (Dr. Muste) の平和主義の講演を聴き感銘を受けるが、国家の行ういかなる戦争にも協力しないという立場には納得しなかった。というのは、ナチス・ドイツやソ連といった全体主義国に屈服するよりも戦争の方が望ましいと思ったので

ある。また、この当時、キング牧師は社会問題を解決する上での愛のもつ力には絶望し、人種隔離制度を解決するには武装反乱しかないと思っていたという。そこにはニーチェの影響もあった。ニーチェはキリスト教的倫理—謙譲、犠牲、天国への願望—を弱さの美化であり、必要と無力から美德を作り出そうとする試みだと攻撃し、大衆への軽蔑に立って、強者による支配を主張していたのだ。

そのようなときインドから帰ってきたハーワード大学のモルデカイ・ジョンソン博士 (Dr. Mordecai Johnson) のマハトマ・ガンジーについての講演を聴き感銘を受け、ガンジーの本を読み漁る。そしてガンジーの行った非暴力的抵抗の運動のなかに社会を変える力としての「愛」の可能性を知る。それまでキングは、「右の頬を打たれたなら」や「汝の敵を愛せよ」という教えを個人と個人との関係においてしか有効でないと考えていた。しかしキング牧師は、キリストの愛の教えを、大規模な社会変革への原動力にまで高めた最初の人だとガンジーを位置づけ、他の思想家には得られなかった知的、道徳的満足感を得たのである。

クローザー神学校での最後の年に、ラインホルト・ニーバー (Reinhold Niebuhr) を読み、クローザー神学校に入学したときに受け入れていた福音主義的リベラリズムの人間の性質についての考え方「すなわち、人間は本来的に善であり、その理性の力を信頼すべきである」という考えを検討しなおすことになる。すなわちリベラルな考え方の根底にある「人間の性善説」は、悲惨な歴史の事実と合わないことに気づき、人間の罪深さに思い至る。また、人間は、理性を悪のために、また悪を弁護するためにも使ってきたことを無視できないと思うのである。他方、人種問題がしだいに解決の方向に向かってきていることを考えたとき、「人間の性質における高貴な可能性」にも思いをはせる。そして人間の心を悪と善の力がせめぎあう場として捉えるのである。

また、2004年に出版されたキング牧師についての伝記 *To the Mountain Top*⁷⁾ は、「自伝」からは知り得なかった広がりや観点からさらに豊かに当時の文脈を照らし出している。

たとえば、著者のスチュアート・バーンズ教授 (Stewart Burns) はキング牧師の思想について、奴隷制に基礎を置く黒人教会の教えとガンジーの非暴力的抵抗が結合されたものだと指摘している⁸⁾。黒人教会という意味には二点ある。一点は、多くの白人プロテスタント教会が避けてきた点、すなわち、この世の悪の存在を強く意識し、それと人間は闘う必要があるという旧約聖書の伝統と、新約聖書の愛の原理を結合した点にあると指摘している。クローザーの時代に、福音主義的リベラリズムに大きな影響を受けながらも、その性善説的人間観に批判を深めていった背景の一つにはこれがあるのであろう。

第二点として、奴隷制の時代に生まれた黒人教会の伝統のなかにはアフリカの宗教の特徴である自然のなかにある神と人間との間の親しい関係という特徴が、黒人教会においては信者が神と感情的な結合を果たし、それを激しい踊りや叫びにおいて表現するという形で継承されて

いることを指摘している。

バーンズ教授によれば、キング牧師の家系には黒人教会のそのような伝統が引き継がれている。キング牧師の松祖父は、奴隷制末期に白人と黒人の双方を受け入れたバプチスト教会で熱烈な信者となり南北戦争後、教会が黒人と白人に分裂するなかで、黒人教会の牧師として黒人たちの間にキリスト教を広めた。その息子は、同じく黒人教会の有名な牧師となるが、その娘が結婚した相手がキングの父親であった。キングの父親は結婚当時、ジョージアの田舎の黒人教会の牧師であったが、後にアトランタのエベネゼール・バプチスト教会の牧師となったのである。⁹⁾

黒人教会の上記のような伝統は父親の教会にも受け継がれていたのである。しかしキング牧師自身は、そのような黒人教会の伝統をあまりに感情的であるとして嫌い、クローザー神学校においてはキリスト教を知的・理論的な形で理解しようとしていたのである。しかし、次に進んだボストン大学の神学大学院での博士号論文においては、白人神学の代表的な理論家ポール・ティリッヒ (Paul Tillich) やカール・バルト (Karl Barth) の理論によって神の概念と存在を基礎づけつつ、人間の運命に対する超然とした神という白人神学の神の概念には立たず、黒人教会の伝統に依拠し、人間がこの世でぶつかる問題や苦しみに関心をもち、一人一人の人間とともにあるものとして神を理解し、そして彼自身、公民権運動の厳しい局面で神との対話を体験している。つまり、キング牧師は、まさに否定の否定という弁証法的な形で黒人教会の伝統を理論的な次元で受け継いでいるのである¹⁰⁾。

さらにバーンズ教授は、キングの教会での説教を、モンゴメリーでの黒人たちのバス・ボイコット運動の高揚と彼らの意識の変革という文脈のなかに置いて理解している。つまり、キング牧師は、黒人キリスト教徒たちがバス・ボイコットに参加した背景には長年のバスでの白人の運転手からの非道で屈辱的な扱いへの鬱積した怒りがあり、バス・ボイコットが提起されたとき、それを自分たち一人々の闘いとして受け止め立ち上がったこと、だからこそ、参加者全員が運動の指導者なのだと言う意識をもっていたこと、そして、市当局がキング牧師をはじめとする指導者たちを起訴し、投獄したとき、黒人大衆はその指導者を励ますために警察署の前に集まり、自ら出頭した指導者たちを励ましたのである。そのような黒人大衆の姿のなかにキング牧師は黒人たちの新しい意識の目覚めを実感したのである。¹¹⁾ つまり、キングの説教は、それを受け止めようとする黒人たちとの絶妙なコール・アンド・レスポンスのなかで話された「状況の言葉」だったのである。

そのようなことを踏まえながら、次に、キング牧師がどのようにしてキリスト教思想を公民権運動を闘う知的・理論的武器に鍛え上げているのかを検討してみたい。

本書の第一の特徴は、南部における人種隔離廃止運動をキリスト教の理念に相応しく、かつ

力強く推し進める上で必要な人間の主体的な資質や生き方、考えかたを論じていることである。このような社会的、実践的な立場の故に、キリスト教徒でなくとも人種差別に反対する人であれば、キング牧師の思想から学ぶことができるのである。

第二に、キング牧師はキリスト教の理念を原点に立ち返って求める。すなわち、キリストその人および、パウロをはじめとする弟子たちの言行を、その時代のコンテクストを意識しつつ、本来の意味に立ち返って明らかにしつつ、そこから根本的に重要と彼が考える点を明らかにし、公民権運動を闘う人々に提供しているのである。そして、それは運動を進める主体としての倫理観・人間観に深くかかわっている。

もう一点強調すべき点と思われるのは、キング牧師が、自分が生きる時代の諸課題を鮮明に意識していたという点である。キング牧師は、黒人への人種差別、人種隔離制度はもちろんのこと、核戦争による人類の滅亡の危機、アメリカ資本主義のもとでの機械化の進行と労働者の失業、富のあまりに不平等な配分、アメリカの第三世界支援の問題点、荒れ狂う赤狩のもとでの言論の自由への弾圧、等、その時代の重大な政治・経済・社会にかかわる問題を強く意識し、アフリカやアジアの人々が植民地の頸木からの解放のために立ち上がり、今や時代が新しい方向に向かっていることを意識していたのである。

さらにキング牧師は、共産主義をどう見るのか、科学と宗教の関係、宗教の現代における独自の役割等、思想的・哲学的課題をも正面から取り上げ、説教のなかに組み込んでいる。

つまり、キング牧師は、一方でキリスト教の原点に立ち返りつつ、他方、キリスト教徒として人種隔離制度の撤廃をはじめとして現代の諸課題にいかに向かうべきなのかを論じているのである。それはまさしくキリスト教の現代的意味を論じるということにほかならない。このように社会正義の実現という実践的課題をキリスト教の課題として受け止める点にも、アウシュビッツの思想とも合間って、奴隷制の時代に、エジプトに奴隷として幽閉されていたイスラエル人を解放した指導者モーゼに一体化した黒人教会の流れに倣うキング牧師の特徴が表れているともいえよう。

そのような観点からキング牧師のキリスト教観について、本書に依拠しながらまとめて見るのが拙論の課題である。

キング牧師は、本書の第一章「強い心と優しい心」(“Tough Mind and Tender Heart”)において、強い人間はその心のなかにそれぞれに強力な反対物を持ち、その二つを和解させつつ統一しなくてはならないとしている。これはヘーゲルの弁証法に依拠した発想であるが、キング牧師はイエスのある教えのなかに、その例を見出している。それはイエスが弟子たちを神の教えを伝導すべく世の中に送り出すときに「私はあなたたちを、狼の群れのなかの羊のごときものとして送り出すのだ」と言い、彼らに行動の指針として「蛇のごとく賢明で、鳩のごとく

善良であれ」と言ったのである。

蛇がもつ狡猾さというイメージと鳩がもつ無垢という反対イメージを人格のなかに兼ね備えるというようにも解釈できるのだが、もう一つの解釈として、蛇の知性や知恵と鳩の善良さを併せ持つ必要とも理解できる。後者であるとすれば、知性や知恵に代表される認識力と善なる価値観という異なったベクトルを持つ特質の結合が必要であるという命題として理解し、読み進めてゆきたい。

キング牧師は、イエスの教えから、この部分を取り出し、説教集の冒頭に置き、説教集の基調に据えることによって、自分がキリスト教神学をどのような角度から切り取っているのかを明らかにしている。ここでは神の正当性や概念、また神の教えについての神学的論争が目的ではないのである。むしろ、それらを踏まえつつ、世界にそれを伝導するという局面における心構えの基本を論じているのである。それはキング牧師が、伝導に立ち向かおうとするイエスの弟子たちの状況と差別廃止のために闘う黒人たちの状況との間に共通性を見出し、イエスが弟子に与えた心構えから学ぶことを基調に据えたからであろう。

すなわち、黒人への差別的制度の不当性を訴え、社会正義を実現するという課題を持って(神の教えを広めるという課題を持って)、黒人に身の程を心得させようという白人たちのなかに飛び込むという厳しい状況に立ち向かおう(狼の群れのなかの羊)とする弟子たちにはどのような心構えが必要なのかを説いているのである。

そしてこの冒頭の心構えがあらゆる局面のなかで貫かれ、非暴力・直接行動へとつながって行くのである。そのような意味において「強い心=知性」と「優しい心=善」の統一は、はキング牧師の説教集、あるいは非暴力・直接行動の思想の出発点であり、土台であり、核心である。そこには旧約の「正義の神」とイエスが新約において新たに切り開いた「愛」の神が統一されており、すでに見たように黒人教会の伝統がそこに継承されているのである。

このようにキング牧師はベクトルの異なる二つの心を共に持つことを心構えとして提起したうえで、その二つの構成要素について説明し、その必要性を説く。

「強い心」とは鋭い批判的知性と断固たる性格の結合である。キング牧師は、この「強い心」に「軟弱なる心 (Soft mind)」を対置している。「軟弱なる心」とは、考えることが苦手で、安易な解決に走りやすく、世の宣伝や嘘、迷信、人種主義的偏見を無批判的に受け入れ、現状に甘んじ、変化を恐れる精神である。

では、キング牧師は、「優しい心」をどのように定義しているのか？それは人を愛する心であり、苦しむ人々を深く思いやる心である。

では、キング牧師が「自由と正義の為の闘いを創造的に押しすすめるためにはその両方を人格のなかに併せ持つことが必要だ」と考えたのは何故か？それは、いずれか一方だけでは不正な現実への屈服か、暴力と、それに対する報復の連鎖を生み出し、創造的な形での新しい社会

や人間関係を生み出すことができないと考えたからである。

たとえば、「強さを欠いた愛」は、「圧迫に対処する唯一の方法はそれに適応することである」と考え、不正や現実の悪に受け身で、無気力で、屈服・妥協し、いつもの平和を求める態度を生み出すからである。キング牧師は、モーゼがエジプトで奴隷の身となったイスラエル人を解放へといざなおうとしたとき、「奴隷は必ずしも解放者を歓迎するものではない」ことを知ったという。解放にともなう試練を恐れ、未知なる世界への冒険や挑戦にしり込みし、たとえ隷属の身であろうと慣れ親しんだ場所におり続けることを望む人々がいたのである。

他方、「愛する心を欠いた強さ」は、「冷たく、超然とし」「他の人々を自分の目的への有用性においてしか評価せず」、「あまりに自己中心的であるがゆえに、他の人々の喜びや悲しみを分かち合うことができない」という。

そして「愛の心を欠いた強い心」の持ち主は、闘いの過程で「無情で憎しみに燃えた人々」を生み出す。彼らは「敵に対し、暴力と、自分の心を蝕む憎しみを持って闘う」。だが「憎しみは一時的な勝利しかもたらさない。暴力はそれが解決する以上の多くの問題を作りだし、永遠の平和をもたらすことができない」、という。

こうしてキング牧師は、自由への闘いの方向として、「強い心と優しい心」を結合し、軟弱な心による自己満足や無作為を避けつつ、他方、「冷酷で無情な心」による暴力や憎悪の道もとらない第三の道、すなわち「非暴力的抵抗の道」を指し示すのである。

「強い心と優しい心の結合」という基本命題のキング牧師の思想のなかでの重要さは、この章の最後で、「強い心」と「優しい心」を併せ持つ存在の極致が実はキリスト教の神そのものであるとしていることから明らかである。

そしてその神は、様々な過ちや失意に孤独や苦しみの最中にある場合でさえ私を決して見捨てないと主張し、神は人格を備えた身近で個人的存在だとする黒人教会の伝統の上に立っていることを示しているのである¹²⁾。

このようにキング牧師は第一章において、闘いに必要な人間像の基本的な姿、特徴、資質を提示しつつ、それが同時に神の姿そのものであると主張しているのである。そして、後の章において、一章で提示された人間像の意味や、人間像を構成する幾つかの重要な要素をさらに展開し、深めているのである。以下、それぞれの章が、第一章の人間像との関係で何をどのように展開し、深めているのかを見てゆくことにする。

第二章のタイトルは「自己変革をとげた非大勢順応主義者 (“Transformed nonconformist”）」である。第一章でキング牧師は自由のための厳しい闘い（狼のなかの羊）のために「強い心と優しい心」を兼ね備えた人間的資質の必要を説いた。そしてこの章でキング牧師はパウロの「我らは天国からの植民である」という言葉を引用し、かつてローマ人がローマ植民地にローマ的生活様式や秩序を広めたことになぞらえながら、キリスト教徒の使命を天国の秩序をこの世に

において実現することであるとしたのである。これはイエスが弟子をキリストの教えを広めという使命をもって送り出すという第一章の言い換えだと考えられる。そして第二章は第一章で提起された「強い心」の秘めた別の側面を照らし出すためであろう。すなわち、キリスト教徒の持つ価値観や考え方は、現実の世の中の大勢を支配する秩序や考え方と対立しており、孤立を余儀なくされることもあるとし、孤立を恐れ大勢に順応してはならないと主張しているのである。

折しも、公民権運動が始まった時期は冷戦の開始を背景とし、アメリカで赤狩りが猛威を振るった時期でもあった。まっとうな意見でさえ、「赤」とレッテルを張られ、公職を追放される恐怖に怯え、大勢に従う傾向が支配した時代であった。キング牧師は、「強い心」のもう一つの表れとして、そのような時代のなかで正しいことをいうのに孤立を恐れ、大勢に流されない「強さ」の必要を説いているのである。

だがキング牧師は第二点として、その前提として次のことを強調している。すなわち、「大勢に順応しないこと自体が善であるわけではなく」、「神」の声を自分に受け入れること、自分の精神を刷新し、そこから生まれる確信に依拠することの必要である。それが「自己変革を遂げた」ということの意味である。

ここで言われている「神」の概念を、キング牧師が第1章の最後で述べていた「神」の概念に重ね合わせて見よう。それは何ら神秘的な概念ではなく、「強い心」と「優しい心」を究極的に併せ持った存在である。それは「謙虚さと愛の精神を持って、この世の悪と強力に闘う」神である。このような精神を身につけることを「自己変革を遂げる」と呼んでいるのである。そして、そのような精神を持ってこの世で活動することがキリスト教徒の使命であり、それは孤立も恐れない精神を必要とすると述べているのである。

さらにキング牧師は第三章から第五章までを自分の「愛」についての思想の展開に充てている。この「愛」の精神こそはイエスの、そしてキング牧師の思想の核心を成すとともに、最も理解と実践が困難な思想だからであろう。そしてキング牧師のいう「愛」とは実は「強い心」と「優しい心」を高度なレベルで統一したものであることを示すのである。

第三章は、「善き隣人であること (“On being a good neighbor”）」である。キング牧師は、有名な「善きサマリア人」の寓話をもちだす。すなわち、ジェリコへの危険な道で盗賊に襲われ、瀕死の重傷を負って道端で倒れている人を通りかかったユダヤ人の司祭もリーバイト人も見て見ぬ振りをしたのに対し、サマリア人だけが助けたという寓話である。

ではこの一見素朴な寓話からどういう意味を引き出すのか？キング牧師は、このサマリア人の善行を特徴づけて「利他主義」と呼ぶ。「利他主義」とは「他者の利益への関心や献身」を意味し、「人類愛」と言った場合の「愛」を定義したものと考えてよいであろう。問題はこの「利他主義」の対象、すなわち「愛」が向けられるべき対象は何かということである。

キング牧師はサマリア人の「利他主義」をユダヤ人の司祭やリーバイト人の態度と比較する。

ユダヤ人の司祭やリーバイト人は、倒れていた人が自分の属する部族や宗教のものではなかったので無視したのである。だがサマリア人にとって愛すべき隣人とは、「特定の誰かではなく、任意の、道に倒れ、助けを必要としていた人である」。つまりサマリア人は、人が属する人種、部族、集団、宗教、国籍を「外的偶然時」、つまり非本質的なことととらえ、そのような表面的なことの奥にある、助けを必要としている同じ人間を見ていたのである。キング牧師はそのようなサマリア人の「利他主義」を「普遍的」利他主義と名付ける¹³⁾。

次にキング牧師は、ユダヤの司祭やリーバイト人の考え方が実は人類の歴史以来の伝統的なものであると指摘し、ユダヤ教自身がイスラエル人のための部族宗教であり、「汝殺すなかれ」はイスラエル人に限定されていたこと、アメリカ独立宣言の「人間は生まれながら平等に創られている」という有名な文章の「人間 (men)」からは女性や黒人が排除されていたこと等の例を上げる。それらは皆、「汝」「人間」と言った普遍的な言葉を用いつつ、その実自分が属する集団以外を排除する狭い人間観をひそませていたのである。

キング牧師はこの寓話によってイエスの説く「隣人愛」が歴史的にも新しい「普遍的利他主義」であったことを明らかにし、「愛」の概念を現代的に豊富化しているのである¹⁴⁾。

キング牧師はそのようにして愛の対象を広げた上で、さらにサマリア人の「愛」の性格を別の観点から論じる。サマリア人の「愛」は、自分の身を危険に曝しても困っている人を助けようとする「危険な」愛であったとする。「危険」という意味は、「普通の人ならこの人を助けようとしたらどのような危険が自分に降りかかるであろうか」と考えるところであるが、サマリア人は、この発想を逆転させ「もし、自分が助けなかったら、この人はどうなってしまうだろうか」と考えたところにある、という。つまり、危機の時代に際し、自らの安全・地位・名声への配慮を第一に置くのではなく、他者の幸せを考えるという資質を「愛する力」という概念に加えているのである。これは「利他主義」をさらに深くつっこんで展開したともいえるであろう。

さらにキング牧師は、サマリア人の愛は、通常の人間としての社会的義務をはるかに超えた「過剰ともいえる愛」であったという。ここでキング牧師は、法律による義務や強制による行動と、それを超えた、心から溢れるものとしての「愛」を区別し、法的強制が持つ社会変革における重要性を強調しつつ、真の人間的な社会の創造は、心から溢れるものとしての「愛」に基づくものでなければならないと論じる。法によって白人の行動や変えることはできても、白人の黒人への心のなかの「恐怖、偏見、高慢、非合理的な感情」を変えることはできない。新に「統合された社会」は、強制された法によってではなく、自発的な、心から湧き出る「愛」によってしか実現できないし、支えられない、というのである。こうしてキング牧師は、「自発的に溢れる愛」に社会変革・創造の原動力であり、究極の目的としての位置を与えるのである。まとめれば、キング牧師のいう愛とは、深い意味での普遍的利他主義であり、そして、それは社

会変革の主体的原動力であるとともに、未来の社会を支える精神でもある。

このようにして第三章において示される「愛」の思想は単なる「愛」を遥かに超えた、人類の歴史を一步前進させる強靱な理性や勇気、優しさに裏付けられたものであることが理解できよう。それが「強い心」と「優しい心」をより高度な次元で統一したと私のいう意味である。

だが、そのようなものとしての「愛」の実現のためには社会的不正と闘わねばならない。そこに生まれるのが敵、味方の関係である。そこで、問題となるのが、いかにすれば敵を許すことができるのか、という難問である。だから第四章、「実践された愛 (“Love in action”）」は、「愛」のもう一つの形態としての「許し」について論じることになる。

キング牧師は、十字架の上のイエスが放った主への祈り「彼らを許したまえ、なんとすれば、彼らは自分のしていることを理解していないのです」を手掛かりとして、どのようにして自分を殺そうとする相手を許すことができるのか、という難問に取り組む。キング牧師が説いているのは次の二点である。

一点は、「汝の敵を愛せよ」という思想は、イエスが一貫して信者に説いていた思想であり、それをイエス自身が実行して見せたこと、しかも、それは自らの死の苦しみを前にし、自らの命を奪う相手に対して言われた言葉であることである。要するに、キング牧師は、「汝の敵を愛せよ」という思想をイエスがそれだけの重みを持って理解していたのだと指摘しているのだ。そして命と引き換えにイエスが発した「彼らを許したまえ」という言葉は、旧約聖書の敵への報復の論理＝伝統的・歴史的思想とは真っ向から対立する思想であり、そこにこそイエスの教えの革命的斬新さがあったことである。

二点目は、キング牧師が、「イエスの十字架上での祈りには、人間の知的・精神的盲目性にイエスが気づいていたことが示されている」とし、「無知が彼らの問題であり、啓蒙こそ彼らが必要としているものである」と指摘していることである。キリスト殺しという後のキリスト教徒からすれば許し難い行為の背後にあったのは、悪なる人格というより、無知であるというのだ。イエスが説いた教えの革命的斬新さを考えたとき、当時の人々がそれを理解し得なかったこと、故に自分が殺されるであろうことをイエスは知っていたのであろう。

そしてキング牧師は、無知なるが故に考えの違う相手を迫害し、戦争をあおり、人種主義を実行する人々が沢山存在すると指摘している。たとえば、かつてキリスト教徒の迫害の先頭に立ったユダヤ教徒であったサウルは神の啓示を受け、キリスト教徒となり、パウロとしてイエスの教えを広くローマ世界に流布することとなった。また奴隷貿易や奴隷制は富をもたらしたが故に正当化され、そのために人種主義イデオロギーが作られたのであるが、それが定着し、制度化されると人々はそれが当たり前で自然なこととして生まれたときから教えられるに至り、誠実な普通の白人市民が人種主義を支持することになるのだという。だから、黒人は、白人の人種主義的な行為のみを見て、白人を憎しみとの対象とするのではなく、白人の無知と闘

いつつ、許すという態度が必要だというのである。

キング牧師は、そのようにして「復讐」の論理を乗り越え、「許す」ことを可能とする論理を、非道な行いをする人間の「知的・精神的無知」に求める¹⁵⁾。ここにも相手の行為を「無知」の結果として理解する高い理解が、すなわち「強い心」が働いていることが重要である。

次の第五章の「汝の敵を愛すること (“Loving your enemies”)」でキング牧師は、「いかにすれば我々は敵を愛することができるのか？」というさらに大胆で根本的な問いかけかけを行い、それに対する自分の考えを順を追って説明する。第一に来るのは、上記の「敵を許す」ことである。「敵を愛す」ためにはまず、我々に危害を加えた敵を「許す」ことが必要だからである。我々はすでに「敵を許す」根拠的の「知的・精神的無知」にキング牧師が求めていることを知っている。キング牧師がここで付け加えているのは、「許す」ことの意味である。キング牧師は、それは相手の行為を忘れるのではなく「相手のなした行為がもはや、相手と関係を持つ障害にはならない」ことを意味するという。

敵を愛するために必要な第二番目のことは、「敵の邪悪な行為は相手の人格の全てではないということを理解し」また、「最悪の人間にさえ善の欠片が存在し、最高の人間にさえ幾分か悪が存在する」ということを理解する必要があるという。¹⁶⁾そしてこのことを理解するためにキング牧師は自らを振り返ってみる必要があるという。すなわち、そもそも、どのような人間も「自己矛盾に引き裂かれた側面」を持っており、「したいと思うことができず、してはいけないことをしてしまう」というパウロの人間の性についての言葉を引き合いにだす。それがわかれば「敵を今までとは違った風に見ることができ」「敵の抱いた憎悪は、恐怖、プライド、無知、偏見、そして誤解から生まれたことがわかり」、「敵が全面的に悪であるのではなく、神の救済的な愛の手の届くところに居る存在なのだ」と理解し、愛することができる」という。

第三番目にキング牧師が指摘しているのは、敵への根本的態度や行動として「敵との間に相互理解を築きあげ、憎しみの壁によって塞がれていた相手の善意の貯蔵庫を解き放つことが可能なように語り、振る舞うことが大事だ」というのである。言い換えれば、敵を打ち負かしたり、屈辱を与えたり、とどめの一突きを与えることが目的であってはならないという。つまり、「敵」を愛することができるためには、相互理解という武器によって敵を愛すべき味方に変えるという態度が必要だということであろう。

次にキング牧師が説明するのは、「敵を愛」と言った場合の「愛」という言葉の意味である。「愛」は「好き」という感情とは全く違うという。人は「子供を脅迫し、家に爆弾を投げ込む人間を好きになどなれない」という。だが、「愛」とはもっと大きなものであり、「アガペ」としての、「すべての人間にたいする理解に支えられた、創造的な救いとなる善意」として「愛」なのだという。

我々は、そのようなキング牧師の言葉のなかに、「強い心」と「優しい心」が「理解と善意」

という形を取って作用していることに気付く。繰り返すが、キング牧師のいう「愛」とは、単なる「優しい心」を超え、そのより高度な段階においては強力な理性・知性に媒介され、支えられ、拡張され、深められたものとしての愛なのである。

次にキング牧師は何故、「愛すること」が必要なのかと問いかける。キング牧師は、それを二重の視点から論じる。第一に、敵に与える効果である。憎しみに対し、憎しみを返すことは憎しみを増幅することにしかならず、愛のみが相手の憎しみを取り除くことができるという。

第二に、自分にどのような効果を与えるのかという視点である。憎しみは我々の心を傷つけ、人格を歪めると指摘する。過度の憎しみは、我々の心のバランスを失わせ、正しい物事の判断力を失わせるというのだ。

そして最後に愛は敵を友人に変えることのできる唯一の力だという。キング牧師はリンカーンの例を挙げている。大統領選挙で彼の政敵となり、ありとあらゆる悪口を言った相手を自分が大統領になったときに、その軍人としての能力を公平に評価し、国防大臣に任命したのであり、そのかつての政敵がリンカーンを「偉大な人間」だと評価したという話である。

キング牧師は、第九章の「打ち砕かれた夢 (“Shattered dreams”）」という説教を始めるにあたり、「人間の経験のなかで最も苦しいことの一つは、ほんどの人が、最も大事にしている希望が実現するのを生きて見るができないことだ」という言葉で切り出している。つまり、キング牧師は、公民権運動の成功を生きて見るができない多くの人々を想定し、「挫折」への心構えを論じるのである。こうして、第九章は、本書の第一章が弟子たちをキリスト教伝道に送り出す際のキリストの弟子たちへの助言で始まったのに呼応し、しめくくりの位置づけを与えられていると見ることができよう。ここでキング牧師が取り上げているのは、キリスト教の布教のために世界を歩き回ったパウロが、当時の世界の果てともいうべきスペインでの伝道を夢見、その帰路でのローマのキリスト教徒との再会を熱望しつつ、実際は、囚われ人としてローマに連行され、牢獄で息絶えたという挫折のエピソードである。

キング牧師がここで論じるのは、我々は人生のなかで体験する挫折にどのように対処すればよいのかという問題である。キング牧師は、幾つかの挫折に対するよくある反応を取り上げている。その一つは、挫折による怒りと恨みを他者に向けることである。(何の罪もない人を「誰でもよかった」と殺害してしまうという事例等はまさにこのような心の屈折の結果であろう)。また、挫折によって、自分に引きこもり、他者に心を閉ざしてしまい、この世のことに無関心となり、超然とした態度を取る人もいる。また、運命論的に挫折を受け止め、運命に身を委ねる人もいる。

キング牧師はそれらの態度を批判したあとで、「これは悲しみである。そして私はそれに耐えなくてはならない」という旧約の預言者エレミアの言葉を引用しつつ、挫折を正面から受け止め、挫折のなかでも目標や望みを見失わない態度を堅持することによって初めて「負債を財

産」に変えることできるというのである。そのような態度のなかに「神」的なものがあり、嵐のなかでも揺るがぬ心を持つことのなかに真の心の平安があるという。

このように見てくると本書を通じ、キング牧師が困難な公民権運動を担ってゆく上での基本的な心構えについてキリスト教の原点に立ち返り、キリストや弟子たちの言行に学びつつ語っていることが了解できる。そしてそこに貫かれているのが、高い運動の志を貫くために、「強い心」と「優しい心」を兼ね備えることの重要性であり、両者の統一されたものがキング牧師のいう深い意味での「愛」そのものであることに気付くのである。すなわち、キング牧師はキリスト教の思想を公民権運動を闘う心構えや倫理として創造的に展開しているのである。

注

- 1) *Strength to Love*. Cleveland: Collins Publishing Co., 1963.
- 2) *Ibid.*, Preface, p.11. (Fortress Press edition をテキストとして使用。以下同じ。)
- 3) *Ibid.*, Preface, p.11.
- 4) "The Cargo Rap", *Higher Ground* by Caryl Phillips, New York: Vintage Books, pp. 168-9.
- 5) *The Autobiography of Martin Luther King, JR.* Ed., Clayborne Carson, New York: Time Warner Group, 1998.
- 6) *Search for Beloved Community* 本書は、キング牧師が自伝においては詳しくは触れていないが、クローザー時代の初期に George W. Davis 教授から学んだリベラルなキリスト教神学がキング牧師のキリスト教神学の基本的立場であることを明らかにしている。
- 7) *To the Mountain Top*, Steward Burns, HarperSanFrancisco, 2004.
- 8) *Ibid.*, pp.92-93.
- 9) *Ibid.*, pp. 47-48.
- 10) Noel Leo Erskine, *King among the Theologians*, Cleveland: The Pilgrim Press, 1994, Chapter 1- 3.
- 11) *Ibid.*, pp. 66-87.
- 12) *Ibid.*, pp. 45-47.
- 13) ここにも端的に見ることができるのは、キング牧師のいう「愛=普遍的利他主義」は「強い心=知性や広い見識」無しには考えられないという点である。いいかえれば、キング牧師の定義する愛は、もはや単なる「愛」ではなく、狭い経験を越えた知性や見識によって浸透され、媒介され、支えられた「啓蒙された愛」なのであり、ここに「強い心」と「優しい心」が結合・統一された、という言葉の意味を見ることができるのである。ヘーゲルの弁証法的な思考をキリスト教の理解のなかに生かしているのである。
- 14) 「地球市民」という最近よく用いられる言葉は、実は、キング牧師の「普遍的利他主義」を現代風に言い換えたものと考えてよいであろう。「地球市民」という言葉は、伝統的な、民族・宗教・人種・国籍の枠に捕われた考え方と対置して理解して初めて意味を持つのである。
- 15) 幼児虐待が実は虐待する母親や父親自身がその犠牲者であり、親として子にどのように振舞ったらいいかかわらなかつたのだ、という例などもこれにあたるであろう。

Strength to Love を読む (加藤)

- 16) キング牧師が、キリスト殺しの行為の直接の原因 = 「無知」について指摘したあと、次に行為の主体の全体の評価の問題を上げているのはきわめてロジカルである。何故なら罪を犯した相手を許すという行為は、その行為のみならず、相手の人格へのトータルな評価にも関わるからである。

(加藤 恒彦, 立命館大学国際関係学部教授)

An Interpretation of *Strength to Love*: The Civil Rights Movement and the Christian Thought of Dr. Martin Luther King, Jr.

President Obama would not have been a reality if it had not been for the Civil Rights Movement which resulted in the Civil Rights Act of 1964 and the start of the Affirmative Action program since in the late 1960s, both of which have contributed to the great change of the social and political situation in the United States to the extent that now race no longer matters in the choice of a President.

Dr. King's philosophy and the tactics of the Non-Violent Direct Action which underlay the Civil Rights Movement are generally ascribed to Mahatma Gandhi. But it is the author's assertion that not enough attention has been given to the Christian thought of Dr. King, which was the basis upon which Dr. King accepted the Gandhi's idea about the non-violent resistance.

Dr. King's Christian thought, theoretically formed during his Crozer Seminary period was strongly influenced at first by Evangelical Liberalism of Prof. George W. Davis and then by Walter Reuchenbusch's idea of Christianity for social change. But Dr. King later rejected their too optimistic views of history and human nature as a result of his encounter with the works of Reinhold Niebuhr and came to think of human mind as a place where good and evil fight with each other.

Strength to Love (1963), a collection of his sermons in black churches is a book where we can find his Christian thought delivered in a systematic way. The main focus of this paper is to show how Dr. King succeeded in creatively applying Christian thought and ethics to the way black people should think and act in their fights against racism and for the desegregation in the South in the Civil Rights Movement.

The main assertion of this paper is that Dr. King emphasizes the importance of the synthesis of "Tough mind" and "Tender heart", which is equivalent to his idea of higher love and which permeates and underlies every aspect of his thought on "love" developed in a systematic and relevant way throughout the sermons.

(KATO, Tsunehiko, Professor, College of International Relations, Ritsumeikan University)